

## ドイツ語「ひとりペア授業」 - その成果と展望 - <sup>1</sup>

‘Paired German classes taught by one teacher’ – results and prospects -

宮下博幸・佐藤文彦

MIYASHITA Hiroyuki, SATO Fumihiko

Abstract:

In Kanazawa University students who learn German should take the course twice a week. The two courses consist of a grammar and a communication lesson and in each course the students are normally taught by different teachers. In 2007 we tried teaching these two classes by the same teacher and examined how it works. After we outlined the content of our classes, we analyzed questionnaires conducted to the students and obtained the following results: In classes taught by one teacher the contents could be effectively organized, the unity in the class could be strengthened and a good atmosphere could also be created compared to other classes taught by two teachers. We therefore claim that the system of teaching two classes by one teacher is a more effective option.

### 1. はじめに

金沢大学の共通教育において初習言語としてドイツ語を履修する学生<sup>2</sup>は、基本的に週 2 コマ、すなわち前期にドイツ語A1 およびドイツ語A2、後期にドイツ語A3 とドイツ語A4 を履修することになっている。<sup>3</sup> このうちドイツ語A1 とドイツ語A3 では文法を中心とした学習、A2 とA4 ではコミュニケーションを中心とした学習を行っている。また授業編成においては、これまで文法クラス (A1, A3) とコミュニケーションクラス (A2, A4) は連携をとりつつも、別の教員が担当するのが通例であった。しかし 2007 年度の授業編成では、両クラスを同一の教員が担当する、すなわち学生の側からは同一の教員の授業を週 2 回受けるクラスをいくつか設けた。このような授業形態を、本稿では文法とコミュニケーションのペア授業を一人で行うという意味で「ひとりペア授業」と呼びたい。このクラスを設けたのは当初は主に編成上の都合であったが、しかしこのようなクラスは異なる教員が文法とコミュニケーションの授業を行うクラスに比べて、学習効果などの点で何らかの相違があるのではないかと考えられる。本稿ではこの点について、通常のペア授業との比較を中心と

<sup>1</sup> 本稿は 2008 年 7 月 29 日の外国語教育研究センター第 3 回研究会における口頭報告「ドイツ語『ひとりペア授業』の成果報告」に基づいている。

<sup>2</sup> 金沢大学では 2008 年度現在、初習言語を共通教育の必修科目としている学類 (旧学部に相当) と選択科目としている学類がある。初習言語を必修科目としているのは、人文学類、法学類、経済学類、地域創造学類、国際学類である。学生は学類ごとに指定された時間帯の授業を履修する。

<sup>3</sup> ただし 2008 年度からは後期にゼミ/ドイツ語充実クラス (読む・書く) とゼミ/ドイツ語充実クラス (話す・聞く) を選択科目として開講し、希望者は後期には最大で週 4 コマ、ドイツ語が履修できる体制になっている。

して相違点を明らかにしたい。具体的には 2007 年度にこのようなクラスを担当した担当した宮下と佐藤が、自身の授業での実践例や学生に対するアンケートの結果をもとに、通常の授業と比較することで「ひとりペア授業」の成果や展望について述べたい。以下では 2. で宮下の授業の概要の報告とアンケート統計を利用した分析、3. で佐藤の授業の実践例の報告と記述式アンケートを利用した分析を行い、4. で両者の分析から明らかとなった点をまとめ、またそれを踏まえて今後の展望を提示したい。

## 2. 「ひとりペア授業」の報告と分析（宮下）

これまでの同一教員によらないペア授業においては、いくつかの問題点があった。まずペア授業とはいうものの、教員はこれまで多くの場合文法とコミュニケーションで別々の教科書を使っており、それぞれの学習事項の順序が違ったり、学習内容が重複したりするという問題があった。これには非効率的な面があり、またそのことによって学生のモチベーションが下がる可能性もあった。もちろんこの場合でも、二人の教員が緊密に連絡を取り、同一の教科書を使って授業を進めるという方法も可能であるが、そのような形はこれまでのところ、部分的にしか実現に至っていない。

またこれまでのペア授業は異なる教科書を使いはするものの、ある程度の連携を目指して授業運営を行ってきた。しかし当然のことながら、毎週互いに進度や内容を報告しあうという体制を、それぞれの授業担当者間で築き上げる必要がある。これは実際のところなかなか煩雑で、ときとして連絡がうまくいかない場合もある。

以上のような点に関して、「ひとりペア授業」は有利な授業形式である。まず同一の教科書で授業を行う形式が容易に導入でき、<sup>4</sup> 連携について悩む必要がないばかりか、学生の理解度に合わせて、臨機応変に授業内容を調整することも可能である。

このように「ひとりペア授業」には、いくつかの利点がありそうだということは、当初から想定されたが、以下ではまず宮下の「ひとりペア授業」の概要を示し、その後とくに学生のアンケート<sup>5</sup>を利用して実際の効果を分析したい。

### 2.1 「ひとりペア授業」の概要

まず宮下の行った「ひとりペア授業」の概要について報告したい。

「ひとりペア授業」を実施したのは、文学部・法学部の学生を対象とするクラスで、学生は必修科目としてドイツ語を履修しており、クラスの規模は 24 名であった。また授業運営の際には、文法・コミュニケーションという従来の区分を必ずしも守らずに授業を行うという選択肢もあったが、この区分はこれまで言語科目の内容上の基本的な合意となって

<sup>4</sup> 以下の 3. の佐藤の報告を参照。

<sup>5</sup> 金沢大学の共通教育機構では学期末に学生アンケートを実施し、その結果は担当者に報告される。以下で材料とするのはそのアンケート結果である。アンケートは基本的に無記名（希望者は記名）で、学期末の最終試験の際に同時に行ったものである。

いるため、この点に関しては、これまでの形を保つことにした。

文法のクラス(A1, A3)においては、従来の授業でも使用してきた文法事項を解説した私製プリント<sup>6</sup>を教材とした。またその補助教材として、学習した文法事項を扱う作文の練習プリントを作成し、おもに宿題として使用した。またこの練習プリントの内容に合わせた小テストを、単元終了ごとに行った。

コミュニケーションのクラス(A2, A4)では、上記の私製プリントに合わせ、そこに登場する文法事項を使ったダイアログや、そのダイアログに関わる語彙を挙げた教材を作成した。このクラスでは文法のクラスでは十分にできない語彙力の強化も目標とした。授業ではダイアログの練習や、またそこに含まれる表現の応用練習をペアやグループで行い、また文法クラスの教材およびこの授業の教材に登場した語彙を問う単語テストを、単元終了ごとを実施した。

## 2.2 ペア授業との比較

以上のような「ひとりペア授業」を他の授業と比較してみたい。比較は文法とコミュニケーションの両方のクラスについて行う。まず文法のクラスについては、宮下が2006年度前期に担当した文法のクラス(A1)を、「ひとりペア授業」のクラス(A1)と比較してみる。

比較対象となる前年度のクラスでは、通常のようにコミュニケーションのクラスを別の教員が担当しており、この教員と連携をとりつつ授業を進めていた。授業内容は基本的に上に記したものと同一で、教材もほぼ同一のものを用いた。またこのクラスも同様に文学部・法学部の学生の指定クラスであり、学生数は40名、全員が必修科目としてドイツ語を履修していた。したがって学生数の違いを除けば、非常に似通った条件のクラスであるといえる。

コミュニケーションのクラスについては、宮下が2007年度の後期に担当したクラス(A4)をひとりペアのクラス(A4)と比較する。このクラスは工学部の学生指定のクラスで、学生は自由選択でドイツ語を履修しており、クラス規模は18名であった。またこのクラスは前期に異なる教員が担当していたのを引き継いだものであった。教材は前期担当者から引き継いだ教科書<sup>7</sup>ならびに会話を中心とした教科書<sup>8</sup>を利用した。このクラスは比較対象としてはかなり異なる要素を含むが、異なる教員のペアで行う、典型的な従来型のクラスである。<sup>9</sup>

まず文法クラスから見てみたい。次の表1は2006年度ドイツ語A1のアンケート結果、

<sup>6</sup> ここでは詳細に見ることはしないが、前期6単元、後期6単元で構成されており、2回の授業でおおよそ1単元進むことを想定している。

<sup>7</sup> 菊池悦朗『改訂版・ドイツ語を楽しく』同学社、2006年。

<sup>8</sup> 清水薫・中島耕太郎『アクティブ・ドイツ語 Auf deutsch!』同学社、2004年。

<sup>9</sup> 本来は宮下が通年で担当した通常のペアのコミュニケーションクラスを比較対象とするのが理想的だが、宮下はこれまで文法クラスしか担当しておらず、このクラスが宮下が担当した授業のうちでは比較できる唯一のものであった。

表2は「ひとりペア授業」のドイツ語A1のアンケート結果である。まずこのうちの円グラフに注目してみたい。

集計結果 科目番号:7421101 『ドイツ語A1』 教官:宮下 博幸 回答数: 40

設問	選択番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計	無回答	ポイント	標準偏差
1:出席率		0	0	4	15	21					40	0	4.4	0.7
2:予習・復習		0	7	18	8	3	2	0	2		40	0	3.6	1.4
3:授業の理解度		0	0	8	29	3					40	0	3.9	0.5
4:理解できなかった理由		0	0	3	0	0	0	5	0	0				
5:理解できた理由		16	5	2	12	9	0	9	13	0				
6:教官の説明の仕方		0	0	9	20	11					40	0	4.1	0.7
7:教材の使用手法		0	2	16	17	5					40	0	3.6	0.8
8:教官の声		0	1	4	18	17					40	0	4.3	0.7
9:教官の授業に対する熱意		0	0	5	19	16					40	0	4.3	0.7
10:教官と学生との交流		0	0	9	19	12					40	0	4.1	0.7
11:学生の受講態度		0	2	15	20	2					39	1	3.6	0.7
12:授業への興味・満足度		0	0	9	19	11					39	1	4.1	0.7

相関係数(網掛けは回答数)

設問	設問	1	2	3	6	7	8	9	10	11	12
1:出席率			0.03	0.30	0.01	0.21	0.07	0.13	0.25	0.00	0.19
2:予習・復習		40		0.34	0.17	0.33	-0.03	-0.01	-0.02	-0.04	0.33
3:授業の理解度		40	40		0.37	0.20	0.29	0.39	0.37	0.08	0.40
4:教官の説明の仕方		40	40	40		0.59*	0.55*	0.55*	0.44	0.29	0.49
7:教材の使用手法		40	40	40	40		0.45	0.25	0.28	0.31	0.42
8:教官の声		40	40	40	40	40		0.46	0.34	0.34	0.30
9:教官の授業に対する熱意		40	40	40	40	40	40		0.42	0.25	0.45
10:教官と学生との交流		40	40	40	40	40	40	40		0.14	0.37
11:学生の受講態度		39	39	39	39	39	39	39	39		0.67*
12:授業への興味・満足度		39	39	39	39	39	39	39	39	39	

相関係数	目安
0.0~0.2	ほとんど相関がない
0.2~0.4	やや相関がある
0.4~0.7	かなり相関がある
0.7~1.0	強い相関がある

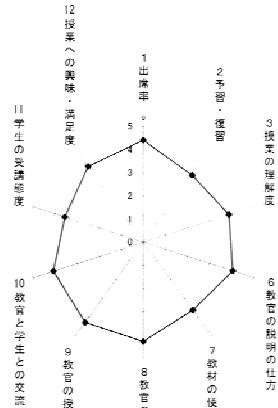


表1 2006年度のドイツ語A1の学生アンケート結果(通常のペア授業)

集計結果 時間割番号:7421101 『ドイツ語A1』(1年) 教員:宮下 博幸 回答数: 23

設問	選択番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計	無回答	ポイント	標準偏差
1:出席率		0	0	2	9	12					23	0	4.4	0.6
2:予習・復習		0	3	12	4	4	0	0	0		23	0	3.4	0.9
3:授業の理解度		0	1	5	17	0					23	0	3.7	0.5
4:理解できなかった理由		0	0	0	0	0	1	6	0	0				
5:理解できた理由		6	4	0	11	3	0	7	4	0				
6:教官の説明の仕方		0	0	1	12	10					23	0	4.4	0.6
7:教材の使用手法		0	0	4	11	8					23	0	4.2	0.7
8:教官の声		0	0	0	8	15					23	0	4.7	0.5
9:教官の授業に対する熱意		0	0	0	7	16					23	0	4.7	0.5
10:教官と学生との交流		0	0	0	6	17					23	0	4.7	0.4
11:学生の受講態度		0	0	2	10	11					23	0	4.4	0.6
12:授業への興味・満足度		0	0	1	12	10					23	0	4.4	0.6

相関係数(網掛けは回答数)

設問	設問	1	2	3	6	7	8	9	10	11	12
1:出席率			-0.36	0.13	-0.23	-0.07	-0.36	0.01	-0.37	-0.10	-0.23
2:予習・復習		23		0.15	0.37	0.5*	0.21	0.08	0.25	0.26	0.45
3:授業の理解度		23	23		0.10	0.02	-0.07	-0.02	0.03	-0.16	-0.18
6:教官の説明の仕方		23	23	23		0.81*	0.5*	0.29	0.23	0.29	0.6*
7:教材の使用手法		23	23	23	23		0.44	0.43	0.29	0.43	0.7*
8:教官の声		23	23	23	23	23		0.51*	0.40	0.16	0.34
9:教官の授業に対する熱意		23	23	23	23	23	23		0.68*	0.55*	0.45
10:教官と学生との交流		23	23	23	23	23	23	23		0.67*	0.56*
11:学生の受講態度		23	23	23	23	23	23	23	23		0.77*
12:授業への興味・満足度		23	23	23	23	23	23	23	23	23	

相関係数	目安
0.0~0.2	ほとんど相関がない
0.2~0.4	やや相関がある
0.4~0.7	かなり相関がある
0.7~1.0	強い相関がある

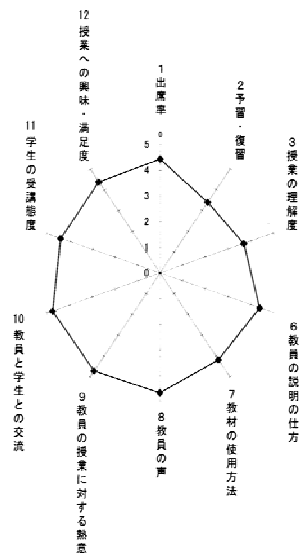


表2 2007年度のドイツ語A1の学生アンケート結果(ひとりペア授業)

ドイツ語「ひとりペア授業」

表右の円グラフは各項目について評価が高いと円に近くなる。まず視覚的に見て明らかのように、「ひとりペア授業」はほとんどの項目において評価が高く、より円に近いことがわかる。さらに以下の表 3 により、具体的に各項目を比較してみたい。

	通常のペア授業	ひとりペア授業	ポイント差異
出席率	4.4	4.4	±0
予習・復習	3.6	3.4	-0.2
授業の理解度	3.9	3.7	-0.2
教員の説明の仕方	4.1	4.4	+0.3
教材の使用方法	3.6	4.2	+0.6
教員の声	4.3	4.7	+0.4
教員の授業に対する熱意	4.3	4.7	+0.4
教員と学生との交流	4.1	4.7	+0.6
学生の受講態度	3.6	4.4	+0.8
授業への興味・満足度	4.1	4.4	+0.3

表 3 ドイツ語 A1 のアンケート項目比較

この表の右欄のポイントの差異に見てとれるように、「予習・復習」「授業の理解度」においてわずかにポイントが下がっている他は、<sup>10</sup> すべてのポイントが上がっており、全体的に授業をポジティブに評価していることがわかる。また特にポイントの上昇が見られるのは網掛けで表示している「教材の使用方法」「教員と学生の交流」「学生の受講態度」である。これはどのように解釈したらよいだろうか。

まず「教材の使用方法」であるが、これは「ひとりペア授業」によって、文法とコミュニケーションがたがいに関連しあう教材を使うことが可能になったためではないかと考えられる。すなわち教材が有機的に機能し、それを学生も感じ取ることでこのような評価になったと解釈できる。

次に「教員と学生との交流」のポイントが高いのは、週 2 回顔をあわせることで関係が密になったためだと考えられる。これは「ひとりペア授業」であるから当然の結果ともいえる。しかし「学生の受講態度」がよりよく判断されるようになったのはなぜだろうか。これはおそらく週に 2 回同一の教員、学生と顔を合わせることで、教員と学生、および学生同士のまとまりが形成されたことによると考えられる。クラスの一体感が生まれたことで、共に学習するという態度や雰囲気によりよい形で形成されたと学生に映ったと解釈で

<sup>10</sup> なぜこの 2 項目が下がったのかは不明であるが、0.2 ポイントの変化はいずれにしても他の変化に比べて最も軽微である。

きる。これは学生の立場からのみならず、担当者自身もペアクラスの方がクラス全体の一体感がある印象を常に持っていた。

次にコミュニケーションの授業である A4 の比較をしてみる。まずは相違を視覚的に確認してみたい。

集計結果 時間割番号:7421414 『ドイツ語A4』 教員:宮下 博幸 回答数: 18

設問	選択番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計	無回答	ポイント	標準偏差
1: 出席率		0	1	2	12	3					18	0	3.9	0.7
2: 予習・復習		0	14	2	0	0	0	0	0		16	2	2.1	0.3
3: 授業の理解度		0	4	7	5	1					17	1	3.2	0.9
4: 理解できなかった理由		0	0	5	1	0	2	7	0	0				
5: 理解できた理由		1	0	0	3	2	0	0	2	0				
6: 教員の説明の仕方		0	0	4	10	4					18	0	4.0	0.7
7: 教材の使用方法		0	0	6	11	1					18	0	3.7	0.6
8: 教員の声		0	0	2	10	6					18	0	4.2	0.6
9: 教員の授業に対する熱意		0	0	3	9	6					18	0	4.2	0.7
10: 教員と学生との交流		0	0	3	6	8					17	1	4.3	0.7
11: 学生の受講態度		0	0	7	9	1					17	1	3.6	0.6
12: 授業への興味・満足度		0	0	6	9	3					18	0	3.8	0.7

設問	1	2	3	6	7	8	9	10	11	12
1: 出席率		-0.01	-0.14	0.00	0.10	0.15	0.13	0.00	0.11	0.10
2: 予習・復習	18		0.48	0.23	0.33	0.17	0.04	0.44	0.44	0.07
3: 授業の理解度	17	16		0.23	0.18	0.40	0.29	0.53*	0.6*	0.15
6: 教員の説明の仕方	18	16	17		0.6*	0.66*	0.85*	0.68*	0.49	0.61*
7: 教材の使用方法	18	16	17	18		0.49	0.56*	0.43	0.51*	0.75*
8: 教員の声	18	16	17	18	18		0.81*	0.78*	0.63*	0.73*
9: 教員の授業に対する熱意	18	16	17	18	18	18		0.72*	0.61*	0.55*
10: 教員と学生との交流	17	16	17	17	17	17	17		0.7*	0.54*
11: 学生の受講態度	17	16	17	17	17	17	17	17		0.51*
12: 授業への興味・満足度	18	16	17	18	18	18	18	17	17	

相関係数	目安
0.0~0.2	ほとんど相関がない
0.2~0.4	やや相関がある
0.4~0.7	かなり相関がある
0.7~1.0	強い相関がある

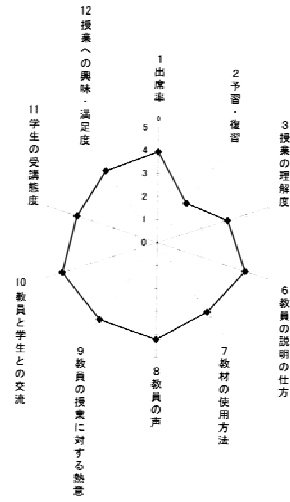


表 4 2007 年度のドイツ語 A4 の学生アンケート結果 (通常のペア授業)

集計結果 時間割番号:7421401 『ドイツ語A4』(1年) 教員:宮下 博幸 回答数: 24

設問	選択番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計	無回答	ポイント	標準偏差
1: 出席率		0	0	3	9	12					24	0	4.4	0.7
2: 予習・復習		1	8	11	3	0	0	0	0		23	1	2.7	0.7
3: 授業の理解度		0	1	9	11	3					24	0	3.7	0.7
4: 理解できなかった理由		1	2	4	0	0	2	8	0	0				
5: 理解できた理由		7	4	0	10	1	0	4	6	0				
6: 教員の説明の仕方		0	0	1	13	9					23	1	4.3	0.6
7: 教材の使用方法		0	0	4	11	9					23	0	4.2	0.7
8: 教員の声		0	0	1	5	17					24	0	4.7	0.5
9: 教員の授業に対する熱意		0	0	1	5	18					24	0	4.7	0.5
10: 教員と学生との交流		0	0	2	3	19					24	0	4.7	0.6
11: 学生の受講態度		0	0	3	13	8					24	0	4.2	0.6
12: 授業への興味・満足度		0	0	4	10	10					24	0	4.3	0.7

設問	1	2	3	6	7	8	9	10	11	12
1: 出席率		0.31	0.56*	0.26	0.35	0.14	0.07	-0.04	0.29	0.39
2: 予習・復習	23		0.29	0.79*	0.65*	0.72*	0.6*	0.53*	0.65*	0.67*
3: 授業の理解度	24	23		0.13	0.45	0.10	0.38	0.43	0.23	0.39
6: 教員の説明の仕方	23	23	23		0.53*	0.9*	0.54*	0.48	0.7*	0.67*
7: 教材の使用方法	24	23	24	23		0.30	0.6*	0.53*	0.64*	0.63*
8: 教員の声	23	23	23	23	23		0.61*	0.54*	0.63*	0.64*
9: 教員の授業に対する熱意	24	23	24	23	24	23		0.88*	0.66*	0.62*
10: 教員と学生との交流	24	23	24	23	24	23	24		0.47	0.45
11: 学生の受講態度	24	23	24	23	24	23	24	24		0.87*
12: 授業への興味・満足度	24	23	24	23	24	23	24	24	24	

相関係数	目安
0.0~0.2	ほとんど相関がない
0.2~0.4	やや相関がある
0.4~0.7	かなり相関がある
0.7~1.0	強い相関がある

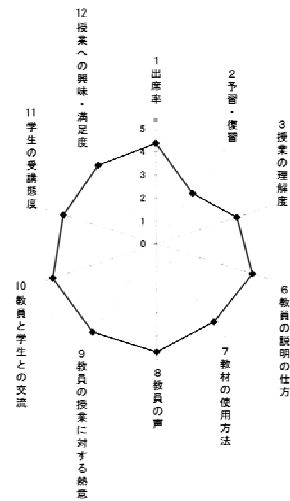


表 5 2007 年度のドイツ語 A4 の学生アンケート結果 (ひとりペア授業)

ドイツ語「ひとりペア授業」

ここでもペア授業の方が多くの項目で評価が高いことが見て取れる。次に各項目について詳しく見てみたい。

	通常のペア授業	ひとりペア授業	ポイント差異
出席率	3.9	4.4	+0.5
予習・復習	2.1	2.7	+0.6
授業の理解度	3.2	3.7	+0.5
教員の説明の仕方	4.0	4.3	+0.3
教材の使用法	3.7	4.2	+0.5
教員の声	4.2	4.7	+0.5
教員の授業に対する熱意	4.2	4.7	+0.5
教員と学生との交流	4.3	4.7	+0.4
学生の受講態度	3.6	4.2	+0.6
授業への興味・満足度	3.8	4.3	+0.5

表 6 ドイツ語 A4 のアンケート項目比較

右欄のポイント差異で見てとれるように、全項目について「ひとりペア授業」の方がポイントが高く、また 0.5 ポイント以上上昇しているものが多い。ここでも「ひとりペア授業」を、学生は高く評価している。「予習・復習」と「学生の受講態度」については、0.6 ポイントの上昇がみられる。これはどう解釈したらよいだろうか。

一般にコミュニケーションクラスでは、文法クラスに比べ、予習・復習のポイントが低い傾向にある。これは前掲の文法クラスの結果と比べると明らかであるが、これはコミュニケーションクラスが一般的に予習・復習をさせにくいことがある。しかし前述のように、ひとりペアクラスでは文法クラスと連動する形で単語テストを実施することが可能であった。このため学生は授業内容の復習を行う機会が増え、このポイントの上昇につながったと考えられる。一方の通常のペアクラスでは、このようなテストを実施することができなかった。

次に「学生の受講態度」であるが、これは前述のとおり、クラスの一体感と関係していると考えられる。通常のペアクラスに比べ、ひとりペアはクラス全体の一体感を作り出し、それが（学生自身の自己判断としての）受講態度の向上につながるのである。比較対象のクラスは特に担当者が途中から交代したこともあり、この点においては不十分であったが、それがこの結果に連動していると解釈できる。また一体感の形成は、「出席率」や「教員と学生との交流」さらには「授業への興味・満足度」などの他の項目とも関わっていると推測される。

## 2.3 アンケート結果のまとめ

以上の結果から、「ひとりペア授業」の効果は大きく二つにまとめられるだろう。

まず「ひとりペア授業」においては、文法クラスとコミュニケーションクラスを有機的につなぐような授業が可能となる。「教材の使用法」のようなポイントが高くなったのは、このためであると考えられる。これは授業の効率が学生にも感じられる程度に高まったということだろう。このようにドイツ語の教授の側面で、望ましい効果があったことが第一点である。これは最初に予想したことであったが、その予想が正しいことが裏付けられたといえる。

さらに学生と教員、もしくは学生同士が週 2 回顔を合わせることで、教員と学生との交流が密になり、教員を中心にクラスの一体感が生まれるという効果がある。これはまた結果として「学生の受講態度」の向上などに関係してくると考えられる。

またこのようなポジティブな効果の波及と考えられる点として挙げておきたいのは、このクラスからドイツ語学ドイツ文学コースへの進級者が 3 名出たこと、ドイツ語サマー・コース参加者が 4 名に及んだことである。このように授業だけでなく、その後の学習にもポジティブな影響があったといえる。

以上に加えて教員の側にも一定の効果があるだろう。すなわち「ひとりペア授業」を受講する学生は、担当者だけにドイツ語を教授されるわけであり、担当者はそのことによって担当している学生に対し責任を感じると同時に、工夫して他のクラスより充実したドイツ語の授業を提供しようという意識が芽生える。実際に宮下も学生たちが夏休みでドイツ語を忘れてしまわないようにという工夫から「夏休みのドイツ語」と題する教材を作成し、宿題として配布したりした。またこの点に関しては、学生の「教員の授業に対する熱意」についての比較的高い評価にもうかがえる。

以上から外国語教育はネイティブ教員とのペアが理想とされる場合が多いが、そのようなペアとは違った意味での「ひとりペア授業」の有効性も考慮すべきであると考えられる。少なくとも「ひとりペア授業」は、別々の日本人教員が担当する場合よりも効果が大きい。もちろん「ひとりペア授業」にも問題点がないわけではないだろう。すなわち学生がその教員と相性が合わない場合には、学生にとって週 2 回の授業が苦痛なものになりかねないという可能性もある。このようなことを十分に配慮できるならば、「ひとりペア授業」は非常に有効な形態であるといえることができる。

## 3. 「ひとりペア授業」の報告と分析（佐藤）

次に佐藤が行った「ひとりペア授業」について、実践例とその成果について報告する。

### 3-1. 「ひとりペア授業」の実践例

宮下同様、佐藤の「ひとりペア授業」も文学部と法学部 1 年生の必修科目で、A1 (A3)



は月曜1限、A2(A4)は木曜3限に開講された。受講者数は16名(新規履修の3年生1名を含む)、その内訳は文学部4名・法学部12名、男女比は3:13(男:女)であった。

まず、佐藤の「ひとりペア授業」が宮下のそれと異なる点は、A1とA2(A3とA4)で同一の教科書を用いた点である。その教科書とは、立教大学1年次の統一教材『シュトラセ・ノイ』であり、<sup>11</sup>立教でもまた、この教科書を用いて「週2コマ同一教員担当の」授業が行われている。<sup>12</sup>つまり佐藤は立教の「ひとりペア授業」用の教科書を金沢でも活用してみたわけである。

この教科書の「教授用資料」によると、立教での標準授業回数は1課(各課とも前半のAと後半のBに区分される)あたり6回を想定しているが、<sup>13</sup>佐藤は1課あたり8回の授業時間を費やした。これは単に進度を遅らせたことを意味するのではなく、教科書とは別に適宜プリント教材を配布し、それらを補助教材として用いたためによる。

本節では、第4課の前半A(以下、Lek. 4Aと略記)を扱った2007年7月5日(木)から19日(木)までの計4回授業について、授業内容を大まかにA1で扱う事柄(すなわち文法)とA2で扱う事柄(すなわちコミュニケーション)に分けながら、報告する。

Lek. 4Aの新出文法事項が前置詞であるため、佐藤はこの課の会話の目標として、1)大学までの通学手段を言える、2)家具の配置を説明できる、3)曜日ごとの予定(時間割)を言える、の三点を設定した。いずれも前置詞を用いた表現である。これらの目標に準じた授業内容を表で示すと、以下の通りになる。

日時 / 科目	A1で扱う事柄(文法)	A2で扱う事柄(会話など)
7月5日(木)/A2	前置詞の格支配(解説と問題練習)	
7月9日(月)/A1	前置詞と定冠詞の融合形(解説と問題練習) 教科書43頁のキーセンテンス(訳)	家具の配置の説明(会話) 大学までの通学手段と所要時間(会話)
7月12日(木)/A2	教科書43頁の本文(大意の確認)	教科書43頁のキーセンテンス(シャドーイング) 教科書43頁の本文(音読) ドイツ(アイゼナッハとドレスデン)

<sup>11</sup> 立教大学ドイツ語教育研究室(監修)『シュトラセ・ノイ』朝日出版社、2007年。

<sup>12</sup> 立教大学ドイツ語教育研究室(編著)『シュトラセ・ノイ 教授用資料[コンパクト板共通]』朝日出版社、2007年、180頁。

<sup>13</sup> 同上

		地誌の情報提供 家具の配置の説明（会話・ゲーム）
	教科書 48 頁の読解問題（宿題）	
7月19日（木）/A2	宿題の返却と講評  3・4 格支配の前置詞（問題練習）  前置詞を用いた作文（宿題）	宿題のテキストの音読 ドイツ（マイセン）地誌の情報提供 家具の配置の説明（前回のゲームの結果発表）  曜日と時間割の表現（会話） 曜日と時間割の表現（聴き取り）

上記の期間中、7月16日（月）は祝日（海の日）で休講だったため、A1 は1回しかなく、A2 の授業は3回あった。こういった（変則）時間割に際し、A1 とA2 を別々の教員が担当する場合、学習効果の継続性と一貫性を維持するのはきわめて困難である。しかし「ひとりペア授業」の場合、同じテーマの文法と会話の両方について、並行して学習することが可能となる。この点について、少し詳しく見てみたい。

佐藤は7月5日（木）のA2の授業において、本来A2で扱う事柄（すなわちコミュニケーション）ではなく、この課で扱う文法事項（前置詞）の説明と問題練習に時間を費やした。そして次の回、7月9日（月）のA1の授業では、冒頭から本来A1で扱う事柄（すなわち文法）よりむしろ、前回のA2で学習した文法事項、とりわけ3・4格支配の前置詞の復習として、この課の会話のテーマのひとつである「家具の配置の説明」に取り組んでいる。その際、教科書とは別の教材を配布し、家具を表す単語の習得にも心がけた。

さらにこの日の授業では、新たな文法事項（前置詞と定冠詞の融合形）を学んだ直後、すぐにこの文法事項を用いた会話表現（大学までの通学手段）の練習に当てている。その後、ようやく教科書（Lek. 4A）に入るのだが、本文より先に「キーセンテンス」を導入に用いることで、それまでの（短文による）会話練習から、教科書の（やや長文の）テキスト読解への橋渡しを行っている。附言すると佐藤が導入に用いたLek. 4Aのキーセンテンス4文はいずれも、それまでの会話練習で扱った事柄、すなわち「空間を表す3・4格支配の前置詞」と「交通手段を表す前置詞」を用いたものである。

7月12日（木）のA2の授業の前半は、Lek. 4Aの本文に当てられた。とはいえ、この教科書の本文（会話文）は訳読には不向きなため、むしろふたりひと組での音読（発音練習）用に活用した。なお、佐藤は各課の最後にあるLesetext（各課の重要文法事項の確認とドイツ地誌の要素を兼ね備えた読み物。Lek. 4Aはドイツ東部の都市・マイセンについて）を読解問題にアレンジして宿題として配布、その後、7月19日の授業では、このテキストを音

読もさせている。そして学期末の A2 の口述試験では、このテキストの音読もまた、課題のひとつにしたのだが、評価に際してのこういった工夫も、A1 と A2 の枠を容易に越えられる「ひとりペア授業」でこそ可能なものであった。さらに宿題に関して言えば、「ひとりペア授業」では宿題の回収および返却が迅速に（たいていの場合は 1 週間以内で）行われるので、学生の理解度の把握もきわめて容易となる。

また、7 月 12 日（木）の後半に行われた、前置詞を用いての「家具の配置の説明」に関するグループ（4 人ひと組）対抗の会話ゲームなどは、クラス・サイズの適正さもさることながら、教員も学生も週に 2 度、同じメンバーが顔を合わせることで生まれるクラスの一体感の有無もまた、成功を左右するように思われる。

次節では、以上のような実践例に基づく「ひとりペア授業」の成果について、学生アンケートに依りつつ報告する。

### 3-2. アンケート結果の分析

2007 年度の前後期それぞれの学期末に、佐藤は「ひとりペア授業」のクラスで以下のようなアンケートを実施した。Frage 2 は、自由記述欄への回答もあわせて掲載する。

Frage 1 4 月初めにドイツ語のクラスを決める時、このクラスだと A1 も A2 も同じ教員が担当するということは考慮に入れましたか。

ええ大いに	3
まあ多少は	7
知ってはいたが考慮の対象ではなかった	5
そんなこと、ぜんぜん知らなかった	1

Frage 2 クラスによっては、月曜の A1 と木曜の A2 を別々の教員が担当する場合もありますが、みなさんは週 2 回、同じ教員だったことについて、よかったと思う点と悪かったと思う点を教えてください。

#### よかった点

先生になじみやすい / 文法とオーラルがちゃんとリンクしてる点 / 生徒のペースに合わせて授業を進めてもらえる / 内容がつながっている / A1 と A2 での気持ちの面での切りかえと区別が必要なくて勉強しやすかった / 月曜によく分からなかったことを木曜にも説明してくれたりできる / 月曜日に残った所を木曜日にするなど、授業の流れがうまくすすんで、聞いているこちら側としても分かりやすかったこと / 前回の授業の続きができる / 先生と親しみやすくなる / どっちかが、進んだり、遅れたりすることがない / 月ように途中だったコトを木ように出来たりした点 / 週 2 度あると、授業のペースが分かってやりやすいです / 文法で習ったことで、会話ができる / 慣れやすかった /

すすめやすいし、同じほうがいいと思う / 週に1回休んでも授業の内容を見失わずにすみません / 授業が途切れない / 学んだ文法がわかっているので、会話の授業がスムーズだった / 月曜の補足を木曜にできたりすること / 同じペースで進む所 / 教室をまちがえずに済む / 1週間あかないから忘れにくい気がした / 文法・会話がかたよりすぎないでよかった / 進度にバラつきがない / 親近感とやることの共通性があるとりくみやすいでした / 佐藤先生と親しくなれた / 同じ先生のほうが分かりやすいしつながってる / 流れがとぎれることがなくてよかったです / 文法で学んだ事を生かして、会話・ゲームができた所 / 文法・会話の進度に差が生じない所が良かったです

悪かった点

区別がつかない / 区別が曖昧 / どっちがどっちだったか忘れる / もし先生のことが嫌いだったらドイツ語が嫌いになる / 週2度あると、週に一度は休みたくなります / どっちがどっちの内容かわからなくなる所

同様の質問を 2008 年度前期末、佐藤がA2 (木曜3限開講)のみを担当した通常のペア授業クラスでも行った。<sup>14</sup> 対象は法学類1年生、37名である。

Frage 1 4月初めにドイツ語のクラスを決める時、このクラスだと週2回、A1とA2を別々の教員が担当するという事は考慮に入れましたか。

ええ大いに	5
まあ多少は	12
知ってはいたが考慮の対象ではなかった	15
そんなの初耳!	5

Frage 2 クラスによっては週2回、A1もA2も同じ教員が担当している場合もあるのですが、みなさんは別々だったことについて、よかったと思う点と悪かったと思う点を教えてください。

よかった点

やり方が偏らないし新鮮だった / 一方の先生の説明でちょっとわからないところも、もう一方の先生の方で分かたりすることもある点 / 飽きない / いろいろな特徴のある授業を体験できる / 2人の先生の教えたり話してくれる視点がたまに違っていているんな事を知ることができたと思う / 2つの授業がごっちゃにならなくていい / いろんな先生をたのしめた / 違った形式で授業を受けられる / いろんな情報を聞くことができた / A1とA2でそれぞれ新鮮味があった / 二人の先生から授業のアドバイス等が聞ける / 新鮮さという気分転換になる / 週に2回も同じ先生と会うとダレるのでよかつ

<sup>14</sup> このペア授業のA1 (火曜2限開講)は日本人教員が担当。

た / 文法は文法、コミュニケーションはコミュニケーションという住み分けがしっかりできていた / 違った教え方を楽しめる / いろいろな話が聞ける / もし片方のテストが悪くてもうまく切り換えができる / 色々な教わり方ができる / 会う回数が多くも少なくもなく、マンネリ化を防げたと思う / A1 と A2 でメリハリをつけることができた / それぞれの先生のいい所を知ることができた / それぞれの授業で雰囲気違ってよい / 2 人の先生に出会えた / 新鮮な気持ちで挑めた

#### 悪かった点

どっちで何を習ったか、たまにごっちゃになる / 授業が統一されない / 生徒の理解度がわかりづらい / ファイルが2つ必要になったこと / 授業のやり方の違い / 進行度合が大きく違ってくると何が何だかわからなくなる / 火曜が少なかったせいか、A2 のスピードが抑えぎみになっていたように思った / 進み具合がピミョーに違う / 授業の進み具合に差が出てしまう / 授業のスピードが違う / 授業形式の差に戸惑った / 進み具合いでやるのが重なったりすること / プリントの形式が違う / ペース（足並み）が合わないときがある / 内容の重複 / 連絡とりあうの大変そうでしたね

Frage 1 の結果から、学生自身はクラス選択時に「ひとりペア授業」と通常のペア授業の違いをさほど意識していないことがわかる。さらに Frage 2 の「よかった点」についての回答からは、自身が受講したタイプのペア授業を是認するまでの意見が目につく。

しかし Frage 2 の「悪かった点」に挙げられた回答をよく読むと、「ひとりペア授業」に比べ、通常のペア授業への不満が少なくないことが明らかになる。例えば「進度の相違」や「内容の重複」といった声に代表される「授業の不統一」に対する不満は、「ひとりペア授業」ならば容易に解決可能であり、その結果、「文法 (A1, A3) とコミュニケーション (A2, A4) の継続性」という「ひとりペア授業」の魅力は、こういった不満の裏返しとして理解することができる。

また、「学生の理解度の把握」も「ひとりペア授業」でこそ、より早く・より確実に行われる（べき）ものであり、そうすることで学生のペースに応じた授業展開が可能になる。佐藤の「ひとりペア授業」受講者の「やりやすい」「慣れやすい」「とりくみやすい」といった印象および感想は、こういった迅速な対応によるものであると予想されるが、そもそも「ひとりペア授業」では、「学生の理解度」以前に「学生自身の把握」がきわめて容易であった。換言すると、受講者が「よかった点」として挙げている「教員との親近感」は、裏を返せば（教員にとって）「学生との親近感」を意味し、両者の相互作用があって初めてクラスの一体感が生まれるのは、言うまでもない。

これに関連し、上記の類の授業アンケートには表れないが、佐藤が通年で「ひとりペア授業」を担当したクラスの受講者たちは、夏休み・クリスマス・年度末に（打ち上げ）パーティを催した。うち2度は佐藤の自宅で開催した。こういったドイツ語（の教員）に「なじみやすい」環境の整備もまた、2年生以降の学習意欲の継続（具体的には、ドイツ語サマー・コースへの参加やドイツ語学ドイツ文学コースへの進級、あるいはドイツ語 B の履修

など)に寄与するものと考えられる。

#### 4. おわりに

以上、宮下と佐藤が行った「ひとりペア授業」のプラスの成果を中心に述べてきたが、別々の日本人教員によるペア授業に比べ、「ひとりペア授業」がより有効な形態であることは明らかになったと思われる。しかし「ひとりペア授業」が万能というわけでは決してない。というのも、そもそも考えられるペア授業の形態として、本論で扱った1)日本人教員による「ひとりペア授業」、およびそれとの対比としての2)ふたりの日本人教員によるペア授業の他に、3)ネイティブ教員による「ひとりペア授業」、4)日本人教員とネイティブ教員によるペア授業もまたあり、現実的には4)の形態でもまた、教員間の連携がうまく運ばば、多くの学習効果が期待されるからである。

とはいえ、外国語の入門(初級)段階からネイティブ教員のもとで学習を行うことの是非をめぐっては、議論の分かれるところである。むしろ基礎固めは母語(日本語)で行い、その後の発展(中級)段階においてこそ、ネイティブ教員は活かされるのではないか、という声もある。本論では、日本人教員とネイティブ教員によるペア授業は考察の対象外としたが、今後の課題として、この種のペア授業で期待される効果と「ひとりペア授業」のそれとの比較検討は、よりより授業形態を考える上できわめて有益であると考えられる。